

華嚴一乘思想の成立について

織 田 頭 祐

中国における華嚴教学が賢首大師法蔵によって大成されたことは、今日衆目の認めるところである。その法蔵の華嚴教学を成り立たしめた要因については様々なものが考えられるであろう。本稿ではそれらの中でもとりわけ重要であると考えられる師智儼の教学について若干の考察を加えることにしたい。法蔵は自著である『華嚴經伝記』の中で師智儼が『搜玄記』を著したことを以て「立教分宗」であると押え、その『搜玄記』が慧光の『華嚴經疏』にもとづいて書かれたものであることを指摘している。このことは智儼の直接の師が地論宗南道派に属する至相寺智正であったことを考えれば、華嚴学の成立に関して極めて重要な意味を持っていると言わねばならない。少くとも法蔵は師智儼の思想の中に華嚴学の地論からの独立を見、そしてそのことが地論学派の祖とも言うべき慧光の『華嚴經』観を手がかりとして成就した、と考えているのである。この二つの主張は華嚴教学の成立に関してどのような意味を物語るのだろうか。本稿ではその問題に焦点を絞りながら、地論学の展開の上で智儼の教学がどのように位置づけられるのかという点を明らかにしたい。

地論学の成立は、『十地經論』の訳出を機にするものであることは言うまでもない。それに関して様々な問題が存在することは今ここでは直接触れないが、いずれにしても地論学の成立に関して慧光が大きな役割を果たしたことは十分に想像されるところであ

る。その慧光の思想を直接伝えるものは今日現存しないが、隋・唐代の教判資料に依れば彼が漸頓円三教判と四宗判なる思想を持っていたことが知られる。このうち漸頓円三教判については法蔵によって紹介されるものがよく知られているが、智儼が『搜玄記』の随文解釈段に示す三教判もやはり慧光の疏からの引用ではないかと考えられる。これについての細い分析は今回は省略せざるを得ないが、結論的に言えば慧光の『華嚴經疏』に広・略二疏があったと言われており、智儼が引用しているのは略疏の三教判であり、法蔵は広疏の三教判を紹介していると考えられる。この略疏の三教判と広疏の三教判とを比較してみると、漸教と頓教の定義は両者の間に全く共通性がなく円教の定義はほとんど同じである。この事実を吟味してみると、略疏の三教判は一乗三乘説を基盤としながら『華嚴經』が頓教であり円教であることを明確にすることとに主なねらいがあるのに対し、広疏の三教判はその基盤を小乗大乘説に移したことによって定義を変更せざるを得なくなつたものであり、そこには化儀としての頓教漸教の意味を見い出すことができない。それは別の面から言えば、それまでの『華嚴經』を頓教とするような伝統的な『華嚴經』観を超えるものとも言えよう。また一方の四宗判が、小乗大乘のそれぞれに浅深を立てることによって組織されたものであることを考えれば、慧光の時代に小乗大乘思想が仏教観の根本的課題として把握されつつあったことが想像される。こうした課題を提供する経論はそれ以前から翻訳され、中国に紹介されていたのであるから、この時代になって改めてそれが中国の仏教者の課題となつたのは何らかの外的な刺激によるものであったことが想像される。菩提流支の半満二教判及び一音教の思想は正にそうした役割を果たしたものであったに相

違あるまい。何となれば、半満二教判は『涅槃經』にもとづく小乗大乘思想であり、一音教は『華嚴經』のみを頓教とするような經典觀に対する批判であったと考えられるからである。このような問題を踏まえながら地論字は最終的に小乗大乘思想を確立していくのである。淨影寺慧遠や至相寺智正によって示される二藏判は正しくそうしたものとして位置づけることができる。慧遠と智正とはその師において法脈を異にするが、二藏判の組織そのものは驚くほどの一致を見せ、あるいはこれは智正が慧遠の二藏判を範としたものであったかも知れないが、問題意識の共通性を窺うことができる。慧遠及び智正は地論宗の系譜では最後に位置づけられる人たちであるから、彼等の二藏判は地論教学の最終的な課題を示すものと言うことができる。つまり地論宗はその成立から一貫して小乗大乘思想の確立をめざしてきたと言いうことができる。その一方で、大乘という概念の確立が小乗を相対させるような性格を持ったものとして理解されていたとすると、このような大乘觀は真に「摩訶衍」として示されるべき内容とはかなりのズレを伴うことになっていくであろう。真の大乘は小乗との相対の上に位置づけられるべきものではないからである。地論教学の大乘觀がこのような見方に陥っていたとすればそれは何らかの新たな視点によって正されなければならないことになるであろう。そうした課題に答えるものとして曇遷による『撰大乘論』の北地開講を位置づけることができる。そこに示される「小乗・大乘・一乗」という視点は、二藏判という形で落ちつきつつあった当時の仏教界に全く新たな問題を提起することになったであろう。

つまり、小乗大乘とは別個に一乗が存在するということは一体どのような意味なのか、またそのような教えは一体どこに見出すことができるのか、といったことが当面する火急の問題となったであろう。曇遷の『撰大乘論』北地開講は、隋文帝の開皇七年（五八七）のことであり、ほとんど晩年になってから『撰大乘論』を知ることになった慧遠においてはこうした問題は全く不消化のままで終わらざるを得なかったのである。このような時代的な背景の上に登場するのが智儼の思想なのである。つまり智儼は地論宗の教学を熟知し、『撰大乘論』及び曇遷の思想を充分に研究し得たことによって、それらを総括するような思想の創造をめざざるを得ない立場にあったのである。そしてそのような課題の克服を『華嚴經』の中に見出し、先輩の解釈に範を取ろうとした時、『華嚴經』を三乗とは別の一乗という視点で理解しようとした人に誰がいたか。地論学の課題が一貫して小乗大乘の確立であったとすると慧光の略疏まで遡らなければならなかったことは明らかであろう。そして略疏の漸頓円三教判を自らの内に取り入れた時、その批判として主張されていた菩提流支の一音教の思想をも取り込むことになるのである。一音教の思想は理としての一乗に立って事としての三乗の存在を認めないのであるから、三乗とは別に一乗が存在するという慧光の一乗觀とは基本的に相い容れないことになる。このような一乗に関する対立する二つの立場が当然のことながら克服されなければならないのであるが、智儼に芽ばえ、法藏において結実する華嚴同別二教判は正しくそのような問題に答えるものとして位置づけることができるのである。